創立１５０周年　「えのきと共に 150 年 これからも笑顔の花さく 皆野小」

学校だより **えのき** ３月号

皆野町立皆野小学校　令和５年３月１日　発行

「仏様の指」　～『教えるということ』大村はま 先生 ～

校長　坂本　勉

最近、子供たちが朝から長縄の練習をしている光景を目にします。それぞれの学級で、大きな掛け声を出しながら熱心に練習をしています。日々、跳ぶ回数が増えていくのが校長室からでも分かります。

話は変わりますが、大村はま 先生の『教えるということ』は 1973 年に出版され、これまで教師や教師を目ざす学生たちに半世紀にわたって読み継がれています。そこに書かれているお話です。

仏様がある時、道ばたに立っていらっしゃると、一人の男が荷物をいっぱい積んだ車を引いて通りかかった。そこはたいへんなぬかるみであった。車はそのぬかるみにはまってしまって、男は懸命にひくけれども、車は動こうともしない。男は汗びっしょりになって苦しんでいる。いつまでたっても、どうしても車は抜けない。その時、仏様はしばらく男の様子を見ておられたが、ちょっと指でその車にお触れになった。その瞬間、車はすっとぬかるみから抜けて、からからと男は引いていってしまった。

大村先生は、その話を聞いて「もしその仏様のお力によってその車がひき抜けたことを男が知ったら、男は仏様にひざまずいて感謝したでしょう。けれども、それでは男の一人で生きていく力、生きぬく力は、何分の一かに減っただろうと思いました」と。男は仏様の指の力でぬかるみを抜けたことを永遠に知らず、自分ががんばってぬかるみから抜けたという自信を持って生きていくでしょう。

『仏様の指』と題するこの話に登場する仏様は、子供の学びを見守り、子供自身が支援されていることに気付かないくらい、適切に支援をする教師の姿につながるように感じます。

例えば、子供は幼いとき、公園など知らない場所に行ったとき、少しずつ行動範囲を広げていきます。しかし、ときどき振り返り、親が自分のことを見てくれているかを確認しながら、少しずつ自信を広げていきます。自転車に初めて乗れたときに、その様子を見守り、子供が自分の力だけで乗れるようになったことを共に喜ぶ親のように、子供の成長の実感を共に味わうことができる魅力的な教師、そして魅力的な教室や学校でありたいと思います。

長縄の跳ぶ回数がたとえ１回しか増えなくても、みんなで努力して成長したことを実感できたとき、子供たちは本当にうれしそうな表情を見せます。そんな様子を学級担任も学習支援員さんも、素敵な表情で見守っています。勉強も大切ですが、それと同じくらい大切なことを子供たちはたくさん学んでいます。子供の学びや実践を丁寧に見守り、一人一人の確かな成長の実感を認め、共に喜ぶ教師でありたい。大村はま 先生のお話はそんなことを教えてくれる気がします。